

# 効果的な英語学習支援プログラムの開発を目指して 応用生命科学部1年生3クラスの場合

松 藤 薫 子

日本獣医生命科学大学 英語学教室

**要 約** 本研究では、日本獣医生命科学大学の応用生命科学部の学生にとって効果的な自習支援の方法を見出すために、平成24年度の食品科学科・動物科学科1年生対象の通年の英語の授業3クラスにおいて、授業の一環として自習支援を行った。学習者の自主性のある程度重んじ、自習と授業の連携を強化した学習プログラムを実践し、その効果を考察した。その結果、全体的には、学習者に自習に対して適度の負担があり、自習を行ってある程度の満足感が得られた。学習量が増加したことにより、英語力の維持が観察された。平均点以下の学生では、英語力の向上がみられた。平均点以上の学生では、適度に負担を感じ、高い満足度の合いを示し、高い実践率を見せたが、学力維持に留まった。高い学習効果をもたらす授業や自習の工夫が今後の課題である。

**キーワード：** 英語自習支援 自習と授業の連携強化 自主的な学習者

日獣生大研報 62, 89-96, 2013.

## 1. 研究の目的

政治・経済・社会などあらゆる分野でグローバル化が進展し、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性が増大している。国際的に活躍できる「グローバル人材」の継続的育成が期待されている。「グローバル人材」とは、語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティを持つ人材と考えられている。英語教育では、異なる国や文化の人々と英語を道具として円滑にコミュニケーションを図る能力の育成が求められている<sup>1,2)</sup>。

大学の英語教育では、この目標に週1回ないし2回の授業時間で到達することは難しく、授業の学習に加えて、授業時間外の学習（以下、自習）が不可欠となる。2005年以来、効果的な自習支援プログラムを中心課題として研究を進めてきた。

2005年から2007年は、英語中級者（お茶の水女子大学の学生）に対して、学習者が実際に自習を実践して、その意義を実感することが、自律的英語学習の有効な動機づけであると考え、授業の一環としてリスニングと多読の自習を課題とした指導と支援を行った。その結果、学習者の自律性を尊重しながら、達成可能な目標を設定し、学習者が自分にあった教材を選択できるように教材について情報を十分に提供し、学習者間での情報交換を促し、実践を定期的に報告させることが、自習の実践率や学習者が感じる満足

の度合いを高めるのに効果的であることがわかった（松藤他2005, 2006a, b, c, 2007a, b, 牛江2008<sup>3-9)</sup>）。

以上の方法が、英語初級者から中級者で、語学レベルに個人差の大きい日本獣医生命科学大学の動物科学科・食品科学科の学生にも当てはまるか、どのような方法が効果的かを2009年度以降に検証・検討を行っている。松藤（2010）では、食品科学科の2クラスにおいて、それぞれのクラスで異なる方法を用いて自習実践を行った結果、自主的方法より管理的方法の方が高い効果が得られることがわかった<sup>10)</sup>。松藤（2011）では、教員が教材・方法などをほぼ決めた管理的方法で、学習量増の見込めるプログラムを実践した結果、自習実践率が高まり、学力向上の傾向がみられた。しかし、前回より学生が負担に感じる度合いが強く満足に感じる度合いが低かったという点は、学習継続につながる可能性が低いため、今後の課題となった<sup>11)</sup>。

松藤（2012）では、教員による強い管理的自習を改善し、管理的方法と自主的方法の組み合わせとその程度、自習と授業の連携度合いを考慮して、食品科学科の通年の1年生対象の英語の授業1クラスに自習実践を行った。前回と比較して、学習者が感じる負担が軽減し、満足の度合いが上昇し、前回と同様に学力向上の傾向がみられた。読書時間は、授業外の自習に加えて、前期だけ授業の一部に入れ後期は入れないとするよりも、通年通して授業の一部として入れたほうが、授業外でも読書を継続する可能性が高いことがわかった。学習者の自主性のある程度重んじ、自習と授業の連携を可能な限り強めた学習支援プログラムの必要

性が課題となった<sup>12)</sup>。

本研究では、前回同様、管理的方法と自主的方法のバランスを考慮し、前回より自習と授業の連携を強化した方法で、前回と同様の傾向が、前回と同程度の語学レベルのクラスと他の2クラスにも当てはまるのかを検討するために、2012年度通年1年生対象の英語の授業3クラスで自習実践を行った。本研究の目的は、このような自習実践の取り組みを報告し、その支援効果を考察することである。

## 2. 先行研究：松藤（2011）と松藤（2012）

松藤（2011）と松藤（2012）はいずれも食品科学科1年生に対する自習実践の結果報告である。入学後すぐに行ったTOEIC Bridgeの結果は、松藤（2011）で扱った2010年度の学生全体の平均は、122.00点（180点満点、受験者94人）、松藤（2012）で扱った2011年度の学生全体の平均は、124.78点（受験者90人）であった。両者の点差は2.78点である。

財団法人国際コミュニケーション協会では、TOEIC Bridgeテストに関して10点以上の差があれば英語力に変化がある可能性が高いとする見解をしている。2010年度の学生と2011年度の学生の全体の学力差はないと考えられる。

松藤（2011）では、2010年度通年の食品科学科1年生対象の英語の授業2クラス（習熟度別編成：上位クラスと下位クラス）において、教員が4種類の自習に関して教材や支援方法をほぼ決め、学習者が実践すると学習量の増加が見込める自習支援を行った。その結果、学習量増加により、英語力の維持もしくは向上の傾向がみられた。しかし、自習に対する学習者の負担の度合いが強く、満足度の度合いが低いことが判明した。

松藤（2012）では、松藤（2011）の結果を踏まえ、2011年度通年の食品科学科1年生対象の英語の授業1クラス（下位クラス）において、教員による強い管理的自習を緩め、自習と授業の連携を考慮に入れた英語学習支援プログラムを実践した。その結果、前回と比較して、学習者が負担に感じる度合いが軽減し、学習者が感じる満足度の度合いが上昇し、前回と同様に学力向上の傾向がみられた。

以下、この2つの研究の指導方法の相違と実践結果の相違を整理し、課題を明らかにする。表1のように、松藤（2011）と松藤（2012）では、単語学習、読書方法、選択、

筆記学習の指導が異なっている。松藤（2012）の方が、概ね、学生の自主性が求められる指導方法である。

単語学習では、松藤（2012）が松藤（2011）より学生の自主性が強く反映される。松藤（2012）では、自分で教材と方法を選び毎週30分以上学習する方法である。しかし、松藤（2011）は、学生は、授業のテキストや多読本から知らない単語を毎週15個、通年を通して計375個を使えるようになることが目標であった。単語カードかノートを使用しなければならず書き方も詳細に指導した。例えば、単語カードを使う場合は、最低限、表に英単語、裏に和訳と例文を書き、自分が覚えるように書き方や単語帳の活用法を工夫するように指導した。また、ノートの場合は、英単語、アクセント、和訳、引用文、辞書からの例文、英作文を書くことで、知らない単語を学習するように指導した。

読書学習では、松藤（2012）の方法が、読書量が少なく自主性が求められるものである。松藤（2012）では、前期において毎授業時間内に10分の読書時間を設けて毎週15ページ以上読むように指導し、後期において授業時間内に読書時間を取らず授業外に読書するように指導した。松藤（2011）は毎授業時間に15分の読書時間を設けて毎週20ページ以上読むように指導した。

選択学習は、両研究において全体的な自習指導に違いはない。しかし、松藤（2012）において、前期定期試験で60点未満の学生を中心に、後期に英文法ドリルを使った勉強会1時間を行った（参加人数10人前後）。その1時間は選択学習時間に含めてよいことにした。

筆記学習は、松藤（2012）の方が学生の自主的な学習が必要である。本研究は1ページに、各学生が自分で選んで書くことが可能であった。しかし、松藤（2011）は、教材・方法が教員により決められていた。授業のテキスト、レベルや興味に合わない場合は多読本のなかの文章の一段落を毎週15段落ノートに書く、できれば論理展開を意識して書く。通年を通してノートに計375個を目標とした。

表2は、下位クラスの結果を松藤（2011）と松藤（2012）で比較したものである。

松藤（2011）と松藤（2012）であまり違いがなかった点は、筆記学習の実践率である。松藤（2011）は段落を書く学習で93.34%、松藤（2012）はノートに書く学習で101.36%である。しかし、松藤（2011）のアンケート調査で、

表1. 松藤（2011）と松藤（2012）の指導方法の違い

	松藤（2011）	松藤（2012）
単語学習	テキストか多読本から毎週15個、単語カードかノートに、書き方を指定	教材・方法は自由 毎週30分以上の学習
読書学習	毎週20ページ以上、 通年：授業内15分+授業外	毎週15ページ以上、 前期：授業内10分+授業外、後期：授業外
選択学習	推薦教材プリントを参考に、教材・方法は自由、毎週1時間以上	左と同じ（*後期：英文法ドリル勉強会、前期定期試験60点未満約10人、1時間）
筆記学習	教材・方法が指定、テキストか多読本から毎週15段落を書く	ノート毎週1ページ、内容は自由（段落、単語、例文、英作文など）

表2. 下位クラスの松藤（2011）と松藤（2012）の結果の比較

下位クラス	松藤（2011）	松藤（2012）
アンケート		
a) 大変だった	76.74%	55.88%
b) やってよかった	48.84%	61.76%
実践結果 単語	平均291.04 (0-492)	平均13.89 (0-29.70)
個数 (2011) 時間 (2012)	目標375個の77.61%	目標14時間の99.21%
読書	平均486.45 (0-1500) 目標500頁の97.29%	平均341.66 (69-628) 目標420頁の81.35%
選択	平均16.76 (0-85.10) 目標25時間の67.04%	平均23.34 (3-38) 目標28時間の83.36%
筆記 段落 (2011) ノート (2012)	段落数平均350.02 (25-816) 目標375個の93.34%	ページ数平均28.38 (3-56) 目標28頁の101.36%
提出回数	平均16.95 (2-22) 目標22回の77.05%	平均14.74 (2-24) 目標24回の61.42%
テスト結果		
学習前平均点	108.89点 (46-122)	108.74点 (86-124)
学習後平均点	115.73点 (86-134)	117.14点 (88-136)
学習前後の点差点	+6.84点	+8.40点
英語力向上 10点以上増の人数	17人 (44人中)	15人 (35人中)
英語力低下 10点以上減の人数	1人 (44人中)	2人 (35人中)

段落学習をやってよかったと答えた学習者の割合が27.38%であることを踏まえると、学生の多くはノルマとして課題をこなし、学習意義を見出せなかったことが推測される。

松藤（2011）と松藤（2012）の大きな相違は、アンケート調査による学習者の負担と感じた割合・満足と感じた割合、単語学習・読書・選択学習の実践率、記録表の提出回数率、テストの結果である。

松藤（2012）が松藤（2011）より良かった点は、1）学習者の負担の度合いが軽減され、2）満足の度合いが上がったことであった。学生が自習が負担で大変であると感じた割合が松藤（2011）の76.74%から松藤（2012）の55.88%へ下がった。また、松藤（2012）の学生が自習をやってよかったと評価した割合が松藤（2011）の48.84%から松藤（2012）の61.76%に上昇した。松藤（2012）のほうが3）単語学習や4）選択学習の実践率が上がった（単語学習：松藤（2011）77.61%、松藤（2012）99.21%、選択学習：松藤（2011）67.04%、松藤（2012）83.36%）。松藤（2011）の単語学習のように教員の強い管理的方法よりも、さまざまな学習方法を説明してそれから選ぶようにする、また、英語の苦手な学生にとっては、どんな教材を選んでいいかわからないという感想を聞くことから、勉強会で使ったドリルのように指定するほうが効果があるように思われる。5）学習前後のテストの点差が向上し（松藤（2011）6.84点上昇、松藤（2012）8.40点上昇）、英語力向上とみなせる10点以上増の人数の割合（松藤（2011）44人中17人38.64%、松藤（2012）35人中15人42.85%）が多かった点も松藤（2012）の方法が良かった点である。

一方、松藤（2012）が松藤（2011）より劣った点は、読書の実践率と記録表の提出回数率であった。松藤（2011）が松藤（2012）より読書量が多かった（松藤（2011）通年で目標500ページ以上、松藤（2012）目標420ページ以上）が97.29%という高い実践率であった（松藤（2012）81.35%）。松藤（2011）は、毎回授業の一部の活動として入れていたため、継続的な読書につながったと考えられる。松藤（2012）のように、読書時間を前期だけ授業の一部に入れ後期には入れないと、後期の授業外での自主的な読書継続には結びつかないようである。記録表の提出回数率は、同じような方法であっても、松藤（2011）が高かった（松藤（2011）77.05%、松藤（2012）61.42%）。

松藤（2012）では、クラス全体において学習者に自習に対する程よい程度の負担があり、自習を行ってある程度の満足感が得られた。それが高い実践率につながり、結果として学習前後のテストの点差に表れたようだ。学習量の増加は英語力維持・向上につながった。学習者が感じるこの程度の負担と満足感であれば、松藤（2012）の実践を踏まえ、今後、学習習慣が身につく、自主的に学習を継続する学生がでてくると考えられる。課題は、学力向上を目指して、学習者の自主性のある程度重んじ、自習と授業の連携を可能な限り強めた学習支援プログラムを検討・検証することである。

### 3. 研究方法

松藤（2012）の結果を踏まえ、2012年度通年の1年生対象の英語の授業3クラスにおいては、自習と授業の連携を



表 3. 学習者が属す 3 クラスの特徴

	習熟度別	人数	TOEIC Bridge 平均点と (点数幅)	呼び名
食品科学科a	有	43人	138.05点 (126-160点)	上位クラス
食品科学科b	有	39人	111.28点 ( 88-124点)	下位クラス
動物科学科	無	46人	129.35点 ( 82-168点)	普通クラス

強化した英語学習支援プログラムを実践した。その自習方法と支援の効果、学習者の評価アンケート、学習者の実践結果、TOEIC Bridgeテストの結果の3つの観点から検証した。

### 3.1 学習者

学習者は、2012年1年生128人である。通年の英語クラス3クラスのいずれかに属している。食品科学科の英語クラスは、入学時4月に実施するTOEIC Bridgeテストの得点に基づき、2段階の習熟度別クラス編成である。動物科学科の英語のクラスは、習熟度によらない学籍番号で分けられたクラス編成である。表3は、3クラスの人数、TOEIC Bridgeテストの平均点と点数幅、本論文で言及する場合のクラスの呼び名を整理したものである。

### 3.2 学習教材・形態と指導・支援方法

学生が授業だけでなく、自習でも使うことを考慮し、教科書は学生の専門分野に関わるテキストにした。食品科学科の上位クラスでは『健康生活に見る食育と栄養』、下位クラスでは『現代の食を考える』、動物科学科の普通クラスでは『アニマル・センス 動物と私達』を使用した<sup>13)</sup>。

自習では、5種類の自習を課した。教科書読書、教科書単語、英文法ドリル、多読、選択教材の学習である。自習期間中に、学生が協力し合って学習が継続できるように、学生間で教材や学習方法などについて情報交換会を行った。

教科書読書では、一週間に教科書の一課分を3回以上読むことを課した。読む方法として、黙読や音読、CDを聞きながらの黙読・音読を紹介した。

教科書単語では、一週間に5個以上学習することを課した。前期開始直後の授業で、単語の学習方法を説明した。教科書から知らない単語を選び、その単語、品詞、訳、例文(引用文または英作文)をノートに書くように指導した。

英文法ドリルは、教材を自分で選ぶことが苦手な学生が増えているため、英文法を復習し、英会話につながる身近な例文が豊富なドリルを指定した。通年を通じて2巡以上ノートに、なるべく前期期間中に終わらせるように指導した。上位クラスでは、通年を通して授業で簡単な説明と口頭練習、授業外で自習がなされた。下位クラスと普通クラスでは、授業では(前期は発音学習をするため)後期から授業中に口頭練習で使用した。

多読では、図書館でレベル別多読用の本を紹介し、去年の学習者のおすすめ本も紹介した。自分で本を選び、毎週15ページ以上、通年を通じて390ページ以上を読むように指導した。通年を通して毎授業時間内に10~15分読み、授業外にも読むように指導した。

選択学習では、推薦教材をプリントにして紹介した。プリントには、語学レベル(基礎・初級・中級・上級)、養成スキル(発音・語彙力・文法・会話・リーディング・リスニング・ライティング)、教材のタイプ(ウェブサイト・DS・CD付きテキスト・PC・ラジオ・TV・本)、タイトルを明示した教材を載せた。そのプリントを参考にし、学習者に自分で教材を選ばせ、毎週1時間以上、通年を通して26時間以上学習するように指導した。

記録表は、学習のたびに記録するように指導した。教科書読書は読んだ回数、単語学習はノートに書いた個数、ドリル学習は学習したページ数、多読学習は読んだページ数とコメント(読んだ内容や見出しや単語)、選択学習は学習した時間と教材名を書かせた。

記録表とノートは、授業前までに、教卓前の机に提出させた。それを教員は、学生が読書している間に、学習内容を確認しマークを記し、必要な場合はコメントを書いて返却した。

情報交換会は、前期の半ばと後期の半ばに授業時に1回ずつ行った。用紙に成功話・失敗談、学習時間(いつ・工夫していること)、読書本(おすすめ本・おすすめしない本・理由)、選択教材(おすすめ教材・おすすめしない教材・理由)、学習継続の秘訣、聞きたいことを宿題にして前もって書かせておき、それをもとに一人ずつ1分程度で発表させた。

### 3.3 支援効果の評価方法

支援効果は、学習者の評価アンケート、学習者の実践結果、TOEIC Bridgeテスト(満点180点:リスニングとリーディング)の結果の3つの観点から検証した。学習者の評価アンケートは最後の授業時に、学習効果や教員の指導・支援効果などを5段階で評定させ、さらに自由筆記で感想・意見を書いてもらった。学習者の実践結果は、学習した教科書読書総回数、教科書単語総個数、ドリル学習量、総多読量、選択教材の総学習時間、記録表の提出回数を調査した。テスト結果に関しては、学習前(4月)と学習後(1月)にテストをして得点の変化を観察した。

## 4. 結 果

### 4.1 学習者の評価アンケート

学習者の自習に対する全体評価としては、4割弱の学生が負担となり大変であったと感じ、7割の学生が課題をやって良かったと評価している。図1は、アンケートの質問「自習が大変だったか、自習をやってよかったか」の回答集計結果である。自習全般に関して、38%の学生が「大

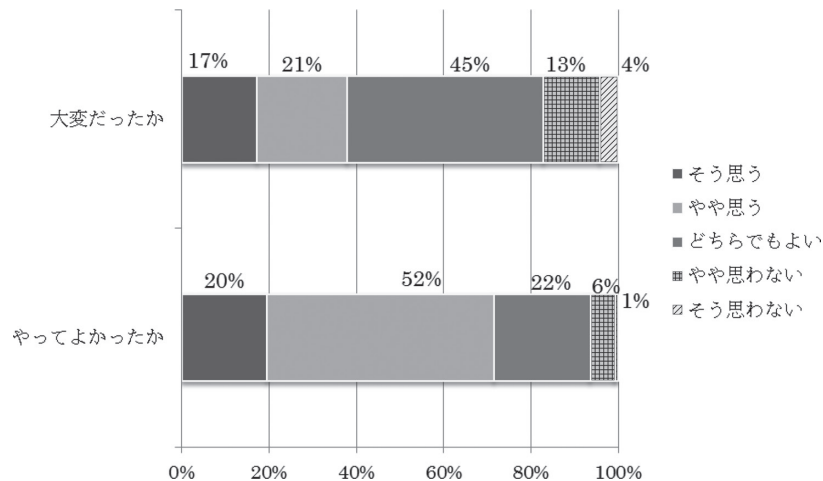


図1. 学習者全体の自習を負担と感ずる度合いと満足と感ずる度合いに関する5段階評価の割合

表4. 自習を負担・満足と感じた学生の割合

	大変だった	やってよかった
全体	37.93%	71.54%
上位クラス	35.14%	83.78%
下位クラス	28.57%	67.50%
普通クラス	47.73%	65.22%

変であると思う・ややそう思う」と感じたようであり、72%の学生が自習をやって良かったと評価している。

表4は、全体の結果にクラスごとの自習に対する評価結果を加えたものである。

アンケートに自習が負担と感ず大変であった点を自由筆記で書いた学生数は、46人であった。複数項目による回答があり、時間確保が大変21人、英語が苦手10人、学習量が多い10人、その他6人であった。自習が負担だったと感ずた割合の高い普通クラスでは、アンケートに答えた46人中22人(47.83%)が負担で大変であったという理由を書き、内訳は、時間確保が大変9人、英語が苦手6人、学習量が多い5人、その他(学習を忘れる・先延ばし)2人であった。上位クラスでは、アンケートに答えた37人中14人(37.84%)が自習が負担で大変であったという理由を書き、その内訳は、時間確保が大変8人、学習量が多い3人、英

語が苦手1人、その他(自分で本や教材を選ぶのが大変・やる気がおきない)2人であった。あまり負担に感ずなかった下位クラスは、アンケートに答えた40人中10人(25.00%)が負担に感ず大変であったという理由を書き、その内訳は、時間確保が大変4人、英語が苦手3人、学習量が多い2人、その他(自分で読書本を選ぶのが大変・読書本の内容がわからないことがあった)2人であった。

#### 4.2 学習者の実践結果

学習者全体の実践率は高かった。教科書読書に関しては、総学習回数は平均81.48回(最低目標値78回の103.85%、最低0回、最高180回)であった。教科書単語に関しては、総学習個数は平均122.50個(最低目標値130個の94.23%、最低0個、最高352個)であった。ドリルに関しては、総学習量は、平均1.94巡(最低目標値2巡の97.00%、最低0、最高3巡)であった。多読に関しては、総読書量は平均354.59ページ(最低目標値390ページの90.92%、最低0ページ、最高781ページ)であった。選択学習に関しては、総学習時間は平均26.48時間(最低目標値26時間の101.85%、最低0時間、最高50.20時間)であった。記録表の提出回数に関しては、総提出回数は平均19.55回(目標値24回の81.46%、最低1回、最高24回)であった。

表5は、全体の結果にクラスごとの自習の実践結果を加えたものである。

表5. 自習の実践結果

	教読書(回)	教単語(個)	ドリル(巡)	多読(頁)	選択(時間)	提出(回)
全体	81.48 (103.85%)	122.50 (94.23%)	1.94 (97.00%)	354.59 (90.92%)	26.48 (101.85%)	19.55 (81.46%)
上位クラス	83.00 (106.41%)	142.07 (109.28%)	1.97 (98.50%)	417.53 (107.06%)	29.17 (112.19%)	20.00 (83.33%)
下位クラス	88.41 (113.35%)	140.74 (108.00%)	2.13 (106.50%)	356.18 (91.33%)	26.38 (101.46%)	19.85 (82.71%)
普通クラス	74.20 (95.13%)	88.74 (68.26%)	1.75 (87.50%)	244.41 (75.49%)	24.04 (92.46%)	18.38 (76.8%)

表 6. 学生が選択した自習教材の具体例

多読教材	Antoine de Saint-Exupery (著), Richard Howard (翻訳), <i>The Little Prince</i> 星の王子様, Mariner Books.
	Sir Arthur Conan Doyle (著), <i>Three Short Stories of Sherlock Holmes: Level 2</i> (Penguin Readers (Graded Readers))
	A. A. Milne (著), <i>Winnie-the-Pooh</i> クマのプー, Puffin; Reissue版
	Lewis Carroll (著) <i>Alice's Adventure in Wonderland</i> 不思議の国のアリス: Level 2 (洋販ラダーシリーズ) IBCパブリッシング
	新美 南吉 (著), Michael Brase (原著), <i>Gon, the Fox</i> こんぎつね, (ラダーシリーズIBC パブリッシング)
選択教材	Charles Dickens (著), <i>A Christmas Carol: Level 2</i> (Penguin Readers (Graded Readers))
	『Forest フォレスト』やその問題集 (桐原書店)
	『Next Stage ネクステージ』(桐原書店)
	『英語ターゲット1900』(旺文社)
	『速読英単語』(Z会)
TOEIC対策本 (新TOEICテストこれ一冊で600点はとれる! (旺文社), TOEIC TEST英単語スピードマスター (ジェイ・リサーチ出版), はじめて受ける新TOEICテスト全パート入門 (アルク) など)	

表 7. テスト結果

	学習前 4 月平均点と幅	学習後 1 月平均点と幅	点差
全体	126.77 (82-168)	133.30 (100-174)	6.53点上昇
上位クラス	138.05 (126-160)	140.47 (114-168)	2.42点上昇
下位クラス	111.28 (88-124)	121.53 (100-146)	10.25点上昇
普通クラス	129.35 (82-168)	136.57 (102-174)	7.22点上昇

表 6 は学生が選択した主な多読教材と選択教材の具体例を示したものである。

#### 4.3 テストの結果

表 7 は 3 クラス全体とクラスごとの学習前と学習後のテスト結果である。どのグループでも、学習後のテストの平均は学習前のテストの平均を上回った。3 クラス全体の学習前テストは平均126.77点、学習後テストは平均133.30点で、6.53点の上昇であった。財団法人国際コミュニケーション協会によると、TOEIC Bridgeテストでは、10点の変動があれば英語力に変化があった可能性が高いとしている。この分析に基づくと、この6.53点の上昇はクラス全体の学力に変化がなかった、つまり英語力が維持されたと評価できる。下位クラスは、10.25点の上昇がみられたため、クラス全体で英語力が向上したと推測される。そのクラスでは、39人中21人が英語力が向上し、英語力が低下した学生はいなかった。

以上から、この方法は、学生にとって自習を負担に感じる程度が適度で、満足感がある程度得られ、実践率が高く、英語力の維持が可能な方法であると言える。実践率が高いことから学習量が増加したと推測でき、それが英語力維持につながったと考えられる。

#### 4.4 考察

本研究の方法は、松藤 (2011) と松藤 (2012) と比較すると、下位クラスには、学習者の自習を負担と感じる割合・満足と感じる割合・実践率・学力向上の点で、一番効果的な方法であった。上位クラスでも効果的であったかどうかを考察する。表 8 は、松藤 (2011) と本研究の結果を比較

したものである。松藤 (2011) は、管理的方法で、学習量の増加がみられたが学習者の負担の度合いが強く感じられたものであった。

上位クラスを対象とした松藤 (2011) と本研究で違いがなかった点は、実践結果であり、両者とも高い実践率である (松藤 (2011) は学習の実践率91.65-116.48%, 本研究 98.50-112.19%)。松藤 (2011) と本研究であまり違いがなかった点は、テスト結果である。学習前後の点差は、両者学力維持の範囲である (松藤 (2011) は2.56点低下, 本研究は2.42点上昇)。若干ではあるが、本研究の方が、点差が向上し、学力向上の人数が増加し (4 人から 9 人)、低下した人数が減少した (8 人から 6 人)。松藤 (2011) と本研究の大きな相違は、学習者の自習に対する負担の度合いと満足度の度合いである。本研究の方が、学習者が負担に感じる程度が軽減し、満足度の程度がかなり上がっている。学生が自習を負担で大変だと感じた割合は、松藤 (2011) では 65.85%, 本研究では 35.14% である。学習をしてよかったという満足感を感じた割合は、松藤 (2011) では 39.02%, 本研究では 83.78% である。松藤 (2011) は、学習した量は多いが、学習者の負担の度合いが強く、満足度の程度が低く、学力向上には結びつかなかった。本研究が、松藤 (2011) より、学習した量が多少少なく、学習者の負担の程度が減り、満足度の程度が上がり、学習前と後での点差が伸びた点で、効果的方法であるといえる。しかし、その方法が、下位クラスと異なり、上位クラスでは学力向上まで至っていない点、問題点として浮上する。これまでの研究で明らかになった点 (約 2 時間の学習時間、自主性を重んじた



表8. 上位クラスの松藤（2011）と本研究の結果の比較

上位クラス	松藤（2011）	本研究（2013）
アンケート		
a) 大変だった	65.85%	35.14%
b) やってよかった	39.02%	83.78%
実践結果 段落（2011） 教科書読書と ドリル（2013）	平均359.65（165-510） 目標375個の95.91%	教科書読書平均83.00（0-133） 目標78回の106.41% ドリル平均1.97（0-2） 目標2巡の98.50%
単語	平均343.70（134-510） 目標375個の91.65%	平均142.07（28-304） 目標130個の109.28%
読書	平均527.67（67-1259） 目標500頁の105.53%	平均417.53（61-781） 目標390頁の107.06%
選択	平均29.12（0-48.90） 目標25時間の116.48%	平均29.17（0-50.2） 目標26時間の112.19%
提出回数	平均17.50（0-22） 目標22回の79.55%	平均20.00（1-24） 目標24回の83.33%
テスト結果 学習前平均点 学習後平均点	134.73点（124-154） 132.17点（112-156）	138.05点（126-160） 140.47点（114-168）
学習前後の点差	-2.56点	+2.42点
英語力向上 10点以上増の人数	4人（43人中）	9人（43人中）
英語力低下 10点以上減の人数	8人（43人中）	6人（43人中）

指導と支援、授業と自習の強い連携）に加えて、高い学習効果をもたらす授業や自習の工夫が必要である。

## 5. ま と め

本研究では、学習者の自主性のある程度重んじ、自習と授業の連携を強化した自習支援プログラムを実践し、このような自習支援の効果を3つの観点で考察した。1つは、学生の評価において、38%の学生が自習を負担であると感じ、72%の学生が自習をやってよかったという評価が得られた。2つめは、学生の実践結果においては、教科書読書、教科書単語、ドリル、多読、選択学習、提出回数において、教員が設定した目標値に対して高い達成度が得られた。3つめは、学習前後のテストにおいて、3クラス全体は英語力が維持できた。下位クラスでは英語力向上がみられ、本研究の方法は効果的であった。上位クラスでは英語力向上まで至らなかったため、今後、高い学習効果の得られる指導・支援方法を検討し、そのような自習支援の実践と効果を検証する予定である。

## 引 用 文 献

- 1) グローバル人材育成推進会議(2012) グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ). [www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf)
- 2) 外国語能力の向上に関する検討会（2011）国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的

施策. 文部科学省.

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf)

- 3) 松藤薫子・絹谷弘子・エドワード シェイファー・ナガトモ ダイアン・牛江ゆき子（2005）.「CALL教材を利用した自習のメールによる支援効果」LET（外国語教育メディア学会）第45回全国研究大会発表要項, pp. 60-61.
- 4) 松藤薫子・絹谷弘子・エドワード シェイファー・牛江ゆき子（2006a）.「英語CALL教材を利用した自習における支援方法の比較」お茶の水女子大学『人文科学研究』2, pp. 217-228.
- 5) 松藤薫子・絹谷弘子・牛江ゆき子（2006b）.「自律型語学学習環境の構築を目指して」第46回LET全国研究大会発表論文集CD, pp. 71-80.
- 6) 松藤薫子・絹谷弘子・牛江ゆき子（2006c）.「自律型語学学習環境の構築を目指して」LET第46回全国研究大会発表要項, p. 19.
- 7) 松藤薫子・絹谷弘子・エドワード シェイファー・牛江ゆき子（2007a）.「自律型学習を目指した英語自習における支援効果について」お茶の水女子大学『人文科学研究』3, pp. 113-127.
- 8) 松藤薫子・絹谷弘子・牛江ゆき子（2007b）.「自律協働型語学学習環境の構築を目指して」LET第47回全国研究大会発表論文集, pp. 166-169.
- 9) 牛江ゆき子（研究代表者）（2008）.『大学における

- 自律学習型語学学習環境の構築』課題番号18520425, 平成18年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書, お茶の水女子大学.
- 10) 松藤薫子 (2010). 「効果的な英語学習支援プログラムの開発を目指して 食品科学科1年生2クラスの自習支援方法の比較」『日本獣医生命科学大学研究報告』**59**, pp.105-112.
- 11) 松藤薫子 (2011). 「効果的な英語学習支援プログラムの開発を目指して 食品科学科1年生の管理的自習支援方法の検証」『日本獣医生命科学大学研究報告』**60**, pp.99-104.
- 12) 松藤薫子 (2012). 「効果的な英語学習支援プログラムの開発を目指して：英語初級レベルの大学生の場合」『外国語教育メディア学会第52回全国研究大会』 pp. 90-91.
- 13) 授業のテキストとして使用したものは、以下のとおりである。  
上位クラス：Akiko TSUDA et al. (2011) *A Matter of Taste*, NAN'UN-DO.  
今居美月 (2010) 『英文法スピード完成ドリル（下）』学研。  
下位クラス：Shinobu SUNAGA et al. (2011) *Food for thought*, NAN'UN-DO.  
今居美月 (2010) 『英文法スピード完成ドリル（上）』学研。  
普通クラス：Jonathan LYNCH and Kotaro SHITORI. (2011) *Animal Sense*, SANSHUSHA.  
今居美月 (2010) 『英文法スピード完成ドリル（下）』学研。

## Development of an Effective Self-directed English Learning Program : A Case Study of Students in the Faculty of Applied Life Science

Shigeko MATSUFUJI

Laboratory of the English Language  
Nippon Veterinary and Life Science University

### Abstract

This study examines an effective method that encourages self-directed learning of English and promotes autonomy for students in the Faculty of Applied Life Science. The participants consisted of 128 first-year students in the School of Food Science and Technology and the School of Animal Science at Nippon Veterinary and Life Science University. Although several difficulties occurred in the self-directed learning process, the overall findings showed a high degree of satisfaction. It also showed that English-speaking beginners improved their command of English, while intermediate students maintained their English language abilities. In regard to the intermediate students' lack of progress, better instructional support for the teacher as well as the students appears to be necessary.

**Key words :** a self-directed English learning program, autonomy of the individual, students' English language abilities

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **62**, 89-96, 2013.